



秋の夜長に本棚の本をとる。『算私語録』（国際的絵本作家の安野光雅氏が数学セミナーという雑誌に昔連載していたユニークなミニエッセイをまとめたもの）だった。しおりが挟んであったページを何気なく開き読む。こんなコラムだ。…NHK にいる M が一方通行を逆に入ってきておまわりさんにつかまった。たまたま乗せていた自分の小さな子が、父の失態を察して大声で泣きはじめた。おまわりさんは、「坊や、泣かないでいいんだよ。お父さんは道を間違えただけなんだからね」といったという。道徳教育を説く人に聞いてもらいたい。こういうのを本当の美談というんだから。…

思い出した。最初に読んだとき、この“おまわりさん”のような人になれるように努力しようと、忘れないようにしおりを挟んでおいたことを。

『算私語録』にある話題は、日常の出来事から、科学・芸術の世界や社会問題までとめどもなく広がっています。今でも朝日文庫からそのⅢまで出ています。

秋の読書週間について

秋の読書週間も終わりましたが、この期間中に図書室の中や廊下に先生方のおすすめの本を掲示しました。（今も引き続き掲示しています。）様々なジャンルの本が先生方から推薦されました。皆さんの中に“新たな気づき”が生まれるきっかけになるかもしれません。ぜひ見に来てください。ここでは渡邊紳太郎校長先生のおすすめ本を紹介します。

『村上海賊の娘 上・下』 著者 和田 竜 出版社 新潮社

内容 時代は戦国時代。天下統一を目指す織田信長とその前に立ちはだかる石山本願寺。この両者の戦い（石山合戦）における瀬戸内海の水軍、村上水軍の娘、景（きょう）を主人公として描かれた作品。信長の視点からではなく、敵対する村上水軍側からみた内容になっており、第一次木津川合戦の史実に基づく一大巨編。

おすすめポイント 我々が歴史を学んだり、歴史小説を読んだりする時、どうしても視点が中央（戦国時代なら信長・秀吉・家康）からになりがちだが、この小説は、攻撃される側の地方からの視点で描かれている。そのため物事には、多角的、多面的な見方ができ、それによって評価やとらえ方が違ってくるということを、あらためて気づかせてくれる作品。

信長らの天下統一事業というのは、世の中を変革させるという画期的なことであるが、別の立場でみてみるとどうか？ 非常に面白い作品である。

読書会について

読書会が、先月10月24日（木）図書室にて行われました。村上春樹の『沈黙』を読み、グループでの話し合いや発表を通して、それぞれの視点と感性で意見をぶつけ合いました。読書は基本的に“自分と本の一对一の対話”だと思いますが、多くの人と共感しながら、様々な視点から、より深く読み込めた時の充実感は、また違った味わいがあります。

村上春樹は海外でとても人気のある作家で、その作品は様々な国で翻訳され、出版されています。毎年10月のノーベル賞シーズンには、今年こそ文学賞を受賞するのではないかといつもマスコミで話題になりますね。残念ながら今年も受賞を逃しましたが、素晴らしい作品は数多くあります。彼の活動や発信が来年こそ評価されるといいですね。

ビブリオバトル

10月20日(日)愛知県図書館で予選が行われ、本校の代表として、1年8組の小島苺香さんが、参加しました。熱戦で惜しくも決勝に行けませんでした。知念実希人の「硝子の塔の殺人」について、情熱的にかつ理路整然と語りとてもいい発表でした。

全県の高校から幅広く参加があり、プレゼンテーションの方法もバラエティーに富み、たとえばラップを取り入れた発表もありました。

今後、本校でもさらに参加者が増え、盛り上がって、図書館の一つの特色あるイベントとなっていくことを期待します。

展示ケース

11月からは2年8組の早川爽一朗君作成の『ガンブラ』や『エヴァンゲリオン』等の模型を約二十体展示します。オリジナルに装飾したものもあり力作ですよ。ぜひ見に来て下さい。

作品展示

図書室内の廊下側の窓に、1年生の書道選択者の優秀作品を掲示しました。唐の四大家の古典の臨書と蘭亭序の臨書です。

図書委員お勧めの本

『月の満ち欠け』(佐藤正午著)

【1年図書委員】

この小説は生まれ変わりについてのお話で、普通の平凡な暮らしをしていた三人の家族の中の娘、大学生の哲彦という人物が恋していた瑠璃という女性、三人家族の中の娘と大親友だったゆいの娘、この三人の女性にいろいろな共通点があり、生まれ変わりについて深く、そしてとても複雑に書かれています。この小説は、一回読んだだけでは分からないような、何回も読むことに意味があるような作品だと私は思っています。

生まれ変わりを信じる人、信じない人どちらにも心に響くような作品で、愛する人がいることの大切さをあらためて感じることができます。

この小説は映画化もされているので、映画を観てから本を読むのもわかりやすいと思います。小説の方が細かい心情なども描かれていてお勧めします。人生について考えさせられるし、ものすごく感動するので、ぜひ読んでみてください。

『女學生奇譚』(川瀬七緒著)

【2年図書委員】

「この本を読んではいけない。」本を開いて一番最初のページに書いてあった一文です。読んだ人は発狂したり失踪しているのだそうで、強く読むなと警告されていたのですが、私は好奇心から読み進めてしまいました。

読んでいくと、本当に読んではいけない本というのはこの本ではなく、物語の中に登場する、戦前に女学生によって書かれた本だということがわかります。この小説の主人公でフリーライターである八坂は、編集長に言われて、この本についてあの手この手で調査をしていきます。八坂も私と同様、特にためらうこともなく、むしろ面白がるように調査し、順調に本の真実に近づいていくのですが、だんだんと彼の周りでおかしなことが起こり始めるのです。それでも八坂は本の調査を継続。そして、最終的に恐ろしい事実を知ります。

何気ないワンシーンや不可解なこと全てが伏線で、強く印象に残るラストシーンでした。私は狂わなかったのを読んでみてください。